

奴隷の私が公爵令嬢で、  
しかも精霊の愛し子って  
本当ですか？

◆ ————— ◆  
下菊みこと  
Mikoto Shimogiku



マチアス

凄腕の魔術師。  
規格外の魔力を持つため  
長い時を生きている。

アマドール

クロティルド公爵家当主。  
普段は厳格だが、  
娘の前では溺愛パパになる。



クリス

ヴィクトルの弟。  
理由あって女性として育てられた。



ヴィクトル

グウェナエル皇国の皇太子。  
エルネストの学友で、  
アンジェリーヌの母とも縁がある。



エルネスト

アンジェリーヌの兄。  
妹が誘拐されてから  
人間不信に陥っていた。

オプスキュリテ

アンジェリーヌの前に  
現れた精霊。



アンジェリーヌ

幼い頃誘拐され、奴隷にされていた  
公爵家の愛娘。精霊に愛され、  
その力を借り受けることができる。

Characters

## 目次

奴隷の私が公爵令嬢で、  
しかも精霊の愛し子って本当ですか？

書き下ろし番外編

二人の皇子の可愛い可愛いお姫様

奴隸の私が公爵令嬢で、

しかも精霊の愛し子って本当ですか？

## 第一部 奴隸の私が公爵令嬢ですか？

私はアン。

自分のことで確かなのはその名前と、幼い頃からとある犯罪組織に奴隸として飼われていることだけ。昨日で十六歳になったらしい。

奴隸として生まれた人は奴隸のまま人生を終える。

例外はなく、私もこのまま人生を終えるのだろう。ボスのお気に入りに選ばれれば少しは良い暮らしができるけれど、私はそれを望まない。

女である私がボスのお気に入りになるということは、つまりはそういうことだから。

奴隸の扱いは過酷だ。

他の組織ではどうだか知らないが、このテンペスタファミリーにおいては、奴隸は残飯しか与えられない。下手をすると三日四日食べられないこともある。飲み物は雨水を啜<sup>すす</sup>るだけ。

衛生管理のためトイレは使わせてももらえないけれど、お風呂なんてもってのほか。雨が降った日に雨をシャワー代わりに浴びるくらいしかない。寝る時は馬小屋で、服はボロ切れを身に纏<sup>まと</sup>うだけ。

主な仕事は死体の持ち物を漁<sup>あさ</sup>って金目のものを見つけてくること。死体を埋める穴を掘ること。死体を処理すること。

ファミリーの皆様のサンドバッグにもなる。殴られる。蹴られる。首を絞<sup>し</sup>められる時もある。

逃げようとすれば、見せしめとして公開処刑される。

男であれば酷い暴力に晒されて殺され、女であればまた別の……尊厳を踏み躪<sup>む</sup>られるような拷問<sup>ごうもん</sup>の末に箱部屋行きになる。箱部屋は、ありとあらゆる尊厳を奪われる、女の地獄。私は絶対に行きたくない。だから逃亡<sup>はく</sup>を図ることすらできない。

奴隸として生きるということは、とても酷だ。もしかしたら、良い人に飼われる幸せな奴隸も存在するのかもしれないが……夢物語だと思っていたほうが楽だろう。

恨<sup>うら</sup>むのなら自分の生まれを恨むしかない。奴隸になったということは、ほとんどが両親も奴隸だったか、子供を奴隸として売らなければならないような両親だったかのどちらかだから。

私は……両親に売られたんだろうか？ それとも両親が奴隷だった？ ……売られたわけではないのなら、いくらか気持ちが悪くなるだけだ。

お父さんとお母さんは、どんな人なのだろう。兄弟はいるのだろうか。幸せに暮らしているのかな。それとも貧しいのかな。売られたのだとしたら悲しいけれど、家族のことを考えるのなら……私が売られて、それで家族が幸せに暮らせているならそれも悪くないのかな。

少ない休憩代わりの待機時間。

目を閉じて顔も知らない家族を思い浮かべていると、突然爆音が聞こえた。

「奇襲だ！」

「おい嘘だろ侵入されたぞ！ 応戦しろ！ 急げ！」

「ひっ……む、無理だ、逃げろ！ アジトは捨てろ！ とにかく全員逃げろー！」

ファミリーの皆様の怒号や悲鳴が響く。ドーンという爆発音、パチパチと弾ける火花。私は目の前の光景が信じられなかった。

テンペスタファミリーは、殺しや盗み、詐欺、薬物の売買などなんでも手広くやっている、裏社会でも有数の力を持つ組織だ。

それが突然の襲撃で、もはや壊滅的なほどのダメージを受けている。

私は奴隷の仲間たちと顔を見合わせた。

……今なら、逃げられるかもしれない。

みんなで頷き合って、逃げ出そうとした次の瞬間――

なにかの光に顔を照らされた。眩まぶしくて目を細めながら光のほうを見ると、そこには煌びやかな服を着た男の人と女の人がいた。女の人が持っている指輪がキラキラ光り、私を照らしている。

「この方が……」

「ようやく見つけた……！」

「ずっと捜しておりましたよ、迷子の姫君」

「助けに参りました、アンジェリーヌ姫君！」

二人は、なぜか私にひざまずいた。一体なにが起きているんだろうか。

「ええつと……どういふことなんでしょうか……」

「アンジェリーヌ・ベアトリス・クロティルド姫君。お迎えが遅くなり、大変申し訳ございませんでした。お屋敷では、姫君をお迎えする準備が整っております。我々と共に帰りましょう」

……それは、誰のことを言っているのだろうか。

「待つてアラン。姫君は幼い頃より行方不明になっていらしたのだから、ご自分のお名前もお立場も覚えていらっしやらないのかもしれないわ。難しいことは後にして、今は保護を優先しましょう」

「……アリスの言う通りだ。わかった、すまない。……姫君。この粗末な馬小屋は姫君には似つかわしくないのです。どうか、我々を信じてついてきてくださいませんか？」

……。よくわからないけど、この人たちは私に言っているんだよね？

うーんと、でも、自分に都合が良すぎて怪しく感じるけれど……今以上に、テンペスタファミリーに飼われる以上に不幸になることはないだろうし、ついていってもいいかな。

「よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げると、アリスと呼ばれた女の人にお姫様抱っこされる。

アランと呼ばれた男の人は私の奴隷仲間を、手を繋いで連れていく。

いつのまにか、怒号は聞こえなくなっていた。

私以外のみんなは、ホテルと呼ばれる大きなお家に連れていかれるらしい。

そこでたくさん美味しいご飯を食べて、魔術で怪我や病気の治療を受け、クロテイルド公爵領というところの孤児院に引き取られると言われた。もし会いたくなったら孤児

院に行けばいつでも会えるらしい。箱部屋行きになった奴隷仲間も無事保護されたと聞いた。よかった。

「アン、一人で本当に大丈夫……?」

「うん、平気だよ！ 美味しいご飯、楽しみだね！」

「それはそうだけど……アンが心配だよ」

「私は大丈夫！ みんな先に行つてて！」

「うん……」

私ほというと、クロテイルド公爵家のお屋敷に連れていかれることになった。

難しいことはよくわからないが、どうやら悪いことになるわけではなさそうだ。

「姫君、お疲れでしょう？ 馬車の中では眠つてしまつてもよろしいですよ」

「はい……おやすみなさい……」

うとうとしていたら、眠つていいと許可をもらったので、その後は熟睡してしまつた。

クロテイルド公爵家のお屋敷にもうすぐ着くというところで、私は目を覚ました。

「……そういえば、俺たちちゃんと姫君に名乗ったか？」

「……あ、し、失礼しました、姫君！ 私はアリス・ルイーズ・ロクサンヌと申しま

す！ クロテイルド公爵家直属の騎士団の者です！」

「俺はアラン・ジョゼフ・ロクサンヌと申します。姉のアリスとは双子なのですよ」

「アリスさんとアランさんですね」

「はい。そして貴女の本当のお名前はアンジェリーヌ・ベアトリス・クロテイルド。貴女は、クロテイルド公爵家の長女なのです」

私の本当の名前？ それに、公爵家の長女？

「私が公爵家の長女？ ……ですか？」

「はい、そうですよ。姫君」

クロテイルド公爵家の長女として生まれた私は、幼い頃に誘拐され、誘拐犯の手によつて奴隸として売られたのだという。

「身代金を支払ったというのに、卑劣な犯人は姫君の証言で捕まるのを恐れて……姫君を奴隸として売ったのです」

「お迎えが遅くなり、大変申し訳ございませんでした。我々のせいです。お許しいただけなくても当然ですが、どうかもう一度、我々に姫君を守る榮譽をお与えくださいませ」

「えっと……えっと……」

正直キヤパオーバーです。なにがなにやらわからない。

「えっと……はい、よろしく願います」

私がそう言うと、アランさんとアリスさんはバアツと笑顔になった。

「こちらこそよろしく願います、姫君」

「姫君、誠心誠意尽くします」

「姫君、今のうちに聞いておきたいことがある、遠慮なくおっしゃってくださいね」

「なにか質問はございませんか？」

「えっと……公爵ってなんですか？」

誘拐されて身代金を要求されたということは、おそらくすごくお金持ちのお家なんだろうとは思っただけだ……

私が尋ねると、アランさんが答えてくれた。

「貴族、ということ。貴族の中でも一番偉い人ですね。えっと……皇族の次に偉い人、と覚えてください」

「皇族……えっと、皇帝様とのご家族の次に偉い人ですか？」

「そうです！ さすが姫君！」

アリスさんが褒めてくれる。なんだかくすぐったい気持ちになる。

「貴族には爵位というものがあ、それが高い順に偉いのです。公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵の順になりますね」

「……私、偉いの？」

「そうですね、姫君」

「姫君は尊いお方なのです」

「……実感が湧かないけれど、大変なことになってしまったのかもしれない。」

「お父さんとお母さんは元気ですか？」

「……」

「……姫君のことをずっと気にかけていらっしやいました」

「なんだか重い雰囲気になる。元気じゃないのかな。会えないのかな。」

「そうなのですね」

「はい。お父様は姫君に会えることを心待ちにしておいでです」

「お母様は……残念ながら、昨年病で……。元々、丈夫な方ではありませんでしたから」

「……そっか」

人の死には慣れているはずなのに、なぜか胸がズキズキ痛む。私は話を変えることに

した。

「私に兄弟はいますか？」

「ええ。お兄様がお一人」

「とても聡明な方ですよ」

「そうなんですか……」

お兄さんがいるんだ。会えるかな。

「姫君のことをとても心配しておいでです」

「きつと可愛がつてくださいますよ」

「そうだといいなあ」

頭をなでてくれたり、しないかなあ。高望みしすぎかなあ。

「どうしたらお父さんとお兄さんと仲良くなれますか？」

「そうですね。まずはお父様、お母様、お兄様と呼んでみましょう」

「お父様、お母様、お兄様？」

「なんだか本当に、貴族みたい。これから本当に貴族になるんだ……」

「そうですね。そして、いっぱい食べていっぱい寝ましょう。その次にお勉強をするのです。姫君はその……奴隷としてあまりにも長く教育を受ける機会を奪われておりました。」

そのせいで、少しだけ知識が足りないところがございます。けれどそれは姫君のせいではありません」

「姫君が悪いわけではないのに、それで姫君が悲しい思いをするかもしれない。それを避けるためには、勉強は不可欠です。頑張る姿をお父様とお兄様に見てもらえれば、褒められますよ」

「……はい、頑張ります！ でも、なんで私が誘拐された子だったってわかったんですか？」

アリスさんは私の質問を聞くと、さっきの光る指輪を取り出した。

「姫君のお兄様から託された、指輪の力ですよ」

「この指輪は、姫君のお兄様の、ごく近い血縁者にのみ反応する魔術がかかっているのです」

「魔術、ですか……すごいなあ」

とりあえず聞きたいことは聞けたかな。

「それと、姫君。一つ大切なことをお教えします」

「はい」

「下の者に、敬語を使つてはいけません」

下の者って誰？ えっと、私は公爵家の長女で、偉いから……。えっと。

「……えっと、アランさんとアリスさんについてこと？」

「そうです！ さすがは姫君！」

「我々騎士団や侍女たちには、敬語は必要ありません」

「えっと……うん、わかった」

つまり、奴隷仲間と話す時の言葉遣いでいいんだよね？

「姫君がこれから仲良くなるであろう貴族のお友達には敬語を使つていただきますが、皇族や貴族以外の者には敬語は使わない。覚えておいてくださいね」

「うん」

「それと、下の者の名前をいちいち覚える必要はありません」

「それは……どうして？」

「このクロティルド公爵家で働く使用人や騎士団員はかなりの数になります。全員覚えるというのはとても難しいことなのです」

「そうなんだ……」

すごいお家だなあ。

「ただ、専属の侍女と侍女長、執事長の名前は覚えておいてください」  
「わかった」

「専属の護衛となる、このアリスとアランの名前も覚えておいてくださると大変嬉しいです」

「うん、覚えたよ」

「さて、姫君。そろそろお屋敷に着きます」

馬車が止まった。

クロテイルド公爵家に着いたんだ。初めて来た自分のお家に、ドキドキする。

「さあ、姫君、降りますよ」

アリスさんにお姫様抱っこされて馬車から降りる。すると使用人なのだろう、綺麗な服を着た人たちがずらりと並んで馬車に……いや、多分私に向かって頭を下げていた。

あまりにもすごい光景に、目を疑う。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

「皆、お嬢様のお帰りをお待ちしておりました」

アランさんとアリスさんはすたすたと使用人たちの前を歩いて、お屋敷に向かう。

私はとりあえず、頭を下げた使用人たちには見えないだろうと思いつつも手を振っておいた。

アランさんとアリスさんはそれを見て、なんだかすぐくニコニコしていた。

「お嬢様は可愛らしいな」

「ええ。充分な学習もできずに、食事もとれなかったせいでしょうけれど、小さくて細くて、まだ幼い少女のよう……」

「十六歳になられたはずだというのに、おいたわしい……」

後ろから使用人たちがヒソヒソ話す声が聞こえたけれど、アランさんとアリスさんがそちらを振り返るとそれも止まった。

「姫君。これから姫君にお仕えする専属の侍女と侍女長、執事長を紹介いたします」

「初めまして、お嬢様。私は侍女長のクラリス・デジレ・エドウィージュと申します」

「初めまして。アンです。……えっと、よろしくね」

緊張しつつもにっこり笑うと、クラリスさんはとても優しく微笑<sup>ほほえ</sup>んでくれた。

「こちらこそよろしくお願ひいたします。こちらはお嬢様専属の侍女となるフルールです」

「初めまして、お嬢様。フルール・ジスレーヌ・マルセルと申します」

「初めまして、アンです。よろしくね」

優しそうな、歳も近いだろう女の子にほっとする。

「こちらこそです、お嬢様！」

「お嬢様、初めまして。私は執事長のグラシアン・ユীগ・ジユスタンと申します。よろしくお願ひいたします」

「うん、よろしくね」

クラリスさん、フルールさん、グラシアンさん。うん、覚えた！

「では、お嬢様。早速ですが、まずはお風呂に参りましょう」

「うん、わかった」

こんな煌びやかなお家だもん、まずは私を綺麗にしないとダメだよ。

アリスさんに抱っこされたまま、お風呂場に連れてこられた。アリスさんは脱衣所の前で待機して、フルールさんと交代。フルールさんは他の何人かの使用人と一緒に、お風呂の準備をしてくれる。

「さあ、早速入浴をしましょう！」

「ごめんなさい、お嬢様。初めてのお風呂ですので、シャワーを念入りに行いましょう」

「お嬢様はなにもされる必要はありませんよ」

「さあ、シャンプーをいたしますね」

「お体も清めましょう」

そうしてシャンプーをされたのだけれど、なかなか汚れが落ちなくて、ノミもいっぱいいるからと、本当に丁寧に洗ってもらった。体も、垢あかが落ち切らなくて何度も何度も洗っては流してもらった。

汚くて申し訳ないのだけれど、洗ってもらうのはとても気持ちがいい。体が楽になる気がする。

「……そろそろ大丈夫かしら」

「さあ、こちらに入浴してください！」

浴槽には良い香りの入浴剤と薔薇の花びらが入っている。

わあい気持ちいい！ 初めて入るけど、お風呂ってこんなに気持ちいいんだ……！

そしてお風呂でぬくぬくの私とは対照的に、侍女さんたちはすごく忙しく動き回っている。

「さあ、せっかく綺麗にしたのですから、リンスも使いますよ」

「美容パックでお顔もケアしましょう」

「う、うん」

なんだかお風呂って忙しいんだね。

「さあ、そろそろ上がりましょう」

やっとかあ。ゆつくりお湯につかった私は、体を拭いてバスローブを着せてもらった。  
「お嬢様、御髪を整えますよ」

「あ、うん」

「こちらへおかけください」

「うん」

魔術で髪を乾かしてもらい、櫛で梳いてもらう。

「お嬢様の御髪は……ダメージが気になりますね。後で専門の者に切りそろえてもらいましょう」

「うん、ありがとう」

「続いてはマツサージです」

「え、マツサージ？」

なんでマツサージする必要があるのかわからないけれど、されるがままになる。

「気持ちいいですか？ お嬢様」

「うん、気持ちいい」

しばらくの間マツサージは続いた。一時間ほど経ち、ようやく終わる。後半は気持ちよすぎて寝てしまったけれど、誰からも咎められなかった。

「ドレスはどれがよろしいですか？ お嬢様」

「あ、うん。じゃあこれがいいな」

私が選んだのは、フリフリひらひらの少ないドレスだった。

「さすがはお嬢様。きつこのドレスは、お嬢様の美しさを引き立てますよ」

フルールさんにドレスを着せてもらう。コルセットは、ちよつとだけきつかった。

「靴はこちらをどうぞ」

「うん、ありがとう」

フルールさんは、ドレスに似合うシンプルだけど可愛い靴を用意してくれた。

「ではこのドレスに合わせた装飾品を……」

「お嬢様、この装飾品の中から好きなものをお選びください」

「ありがとう」

私はたくさんのアクセサリの中から、シンプルな指輪を一つ選んでつけてみることにした。

「そうだ！ 香水をつけてみますか？ お嬢様」

「あ……うん」

香水なんて初めてつける。

「今日は薔薇の香りでリラックスしましょう」

「せっかくですから、お化粧もいたしましょうか」

なんだろう……なんか……すごく大切にされている気がする。なんだか、ちよつとむず痒い。

「……」

「お嬢様。鏡をどうぞ」

「……え。これが、私？」

「お美しいです、お嬢様」

金の髪にピンクの瞳、陶器のような肌のお嬢様。

こんなにきらきらしたお嬢様が、私だなんて。

「……っ！ みんな、ありがとう！」

思わず侍女たちにお礼を言う。

「素材がいいからこそです」

「お嬢様は本当にお美しいです」

「御髪を切りそろえて毎日ケアすれば、さらにお美しくなりますわ」

その後フルールさんが呼んだ美容師さんに髪を切ってもらった。



おかつぱになった自分は、なんだか別人みたいですごく可愛い。  
「さあ、お嬢様。この後はお食事をして、歯を磨いて寝ましょうね」

「うん」

フルールさんに連れられて食堂に行く。給仕のお姉さんがご飯を運んでくれる。すごく美味しそうで、こんなの初めてだ。

「……えっと。これ、全部私が食べていいの？」

「はい、お嬢様。全部お嬢様のためのお食事ですよ。食べ切れなければ残しても構いませんが、食べられるだけ食べましょう」

「うん、わかった。いただきます」

でも、スプーンやナイフなんて使わせてもらったことがないから、使い方がわからない。

ボスはいつもどんな風に食べてたっけ……

ボスのご飯の食べ方を必死に思い出しながら手を動かす。

ちらりとフルールさんを見ると微笑んでくれたので、多分間違えてないと思う。

まずはお野菜をたくさん食べる。テンペスタファミリーで出されていた残飯と違って、とても美味しい。次にスープを飲む。優しいお味でとろみがついている。ほっとする温

かさだ。

「食事って、こんなに満たされるんだ……」

「そうですね、お嬢様。これから毎日楽しみましょうね」

「うん！」

次は白身魚。ちよつと食べづらいけれど、こんなにいっぱい食べられるところがあるんだね。

それからシャーベット。冷たくて、さっぱりして美味しい。

これで終わりかなと思ったら、今度はお肉が出てきた。お肉なんて初めて……！

こんなに贅沢ぜいたくして、いいのかな。

「今日一日ですごく贅沢しちゃったよ……」

「最後にデザートもごさいますよ、お嬢様」

「デザート!? いいの!」

「もちろんです」

最後にデザートフルーツが出る。甘くて美味しい……！

たっぷり食事を堪能たんのうして、結局完食してしまった。

こんなに食べたのは初めて……。コーヒーを出してもらって飲み干す。大満足。

「美味しかった。ご馳走さまでした！」

「ご満足いただけただけならなによりです。では、歯磨きをして寝ましょうか」

「うん」

フルールさんは私の部屋だという、大きな部屋に案内してくれた。

煌びやかで可愛らしい内装にちよつとだけ気後れする。

歯磨きをして、寝る準備を整える。せつかくしてもらったお化粧も落として、寝巻きに着替えた。

「フルールさん」

「はい、お嬢様」

「お父様とお兄様には、いつ会えるの……？」

今日は、せつかくフルールさんたちに綺麗にしてもらったのに会えなかったな。

もしかして、ずっと会えないのかな。

「お嬢様……ご心配には及びません。明日には、必ず会えますよ。旦那様は明日の分まで仕事を終わらせるため頑張っているらしいですよ。坊ちゃんなんて、グウエナエル学園の寄宿舎から大急ぎで帰っていらつしやるのですから」

「グウエナエル学園？」

「このグウエナエル皇国有数の寄宿学校です。皇族と貴族のみが通える学校で、坊ちゃんは皇太子殿下と共に希代の天才と呼ばれていらつしやるのですよ」

「えっと……すごいってこと？」

お兄様はすごいんだ……。私も見習わなくちゃ。

「そうです。とてもすごいです。そんなお忙しい坊ちゃんが、寄宿舎を飛び出してお帰りになるのですからよっぽどです。それだけお嬢様は愛されていらつしやるのですよ」

「そっかあ……」

そうなら嬉しいなあ……

「では、お嬢様。ベッドに横になってくださいませ」

「うん」

ふかふかのベッドの上で横になる。フルールさんにはっこり笑ってくれた。

「お嬢様、今日は一日お疲れ様でした。良い夢を」

「おやすみなさい」

「おやすみなさいませ」

ベッドはとても心地よくて、私はすぐに眠ることができた。

朝になった。

フルールさんが私の部屋のカーテンを開ける。

私の一日が、暖かな日の光を浴びて始まる。

「お嬢様、おはようございます」

「んん……おはよう、フルールさん」

「洗顔用のお水とタオルです」

「ありがとう」

顔を洗ってさっぱりする。次は着替えた。

「ではお着替えをいたしますね」

フルールさんが私の着替えを手伝ってくれる。

「御髪を整えさせていただきます」

そう言うと、フルールさんは私の髪をとかしはじめた。

「香水もつけましょう、お嬢様。旦那様と坊ちゃんの好きなラベンダーの香りです」

「うん」

「僭越ながら、今日は私がお化粧をさせていただきますね」

フルールさんに化粧をしてもらう。昨日みたいに可愛くなれて嬉しい。

「ではお嬢様。朝食にいたしましょう」

「うん」

朝食を食べて、お父様とお兄様を待つ。早く会いたいなあ。

「フルールさん、今日はお父様とお兄様に会えるんだよね？」

「もちろんです、お嬢様」

「お勉強、まだなにもしてないけど大丈夫かな？ 嫌われないかな？」

「大丈夫ですよ、お嬢様。お勉強は専属の先生がついてからでいいんです。まずは、のんびり体を休めましょう。お嬢様は、それだけ過酷な環境にいらっしやったのですから」

「うん。わかった。ありがとう、フルールさん」

のんびりかあ。でも、早く先生が決まったら嬉しいなあ。

「お嬢様は、旦那様と坊ちゃんにお会いになったら、なにをさかたいたいですか？」

「えっと……」

なにがしたいとかはないなあ。

「お話しして、ずっと一緒にいられたら嬉しいけれど……それ以上はないかな」

「……そうですね。お嬢様はもう少しわがままをおっしゃってもいいのですよ？」

「うん、わかった」  
でも、わがままってなにを言えばいいんだろう。私が困っているとフルールさんが提案してくれた。

「では、旦那様と坊ちゃんに、なにをしてほしいかを考えてみましょう」  
「えーっと……頭をなでてもらいたい……かな」

「それは良いお考えですね。旦那様にお会いになったら、お願いしてみたいかがでしよう？」

「え、いいのかな……」

お父様は、受け入れてくれるかな？

「もちろんですよ、お嬢様」

「そっかあ」

「他にはなにかありますか？」

他かあ……うーんと……

「えっと……抱きしめてほしいかな」

「それも良いお考えですね。ぜひ坊ちゃんにお願いしてみましよう」

「うん、わかった。お願いしてみるね」

「応援しておりますね、お嬢様」

「ありがとう、フルールさん」

お父様とお兄様、早く会いたいなあ。

それから少し後、コンコンとドアをノックして侍女がやってきて、フルールさんになにかを告げた。

「お嬢様。旦那様がいらっしゃいましたよ」

「！」

お父様が来てくれた……！ ドキドキする、どうしよう……！

「アンジェリーヌ……お前なのか……？」

初めて会ったお父様は、銀髪をオールバックにした、紫の瞳でツリ目のとても厳しそうな人。

でも、会えて嬉しい。でも、緊張する。どうしよう……

「アンジェリーヌ……やっと会えた……！」

おやおすと近寄りながら挨拶もできないでいた私の手を、お父様は優しく握ってくれた。

その温もりに、涙が出てくる。

奴隸としてどれだけ酷いことをされても、泣くことなんてなかったのに。

「う……ふっ……ぐすっ……お父様……ずつとずつと、お会いしたかったです……！」

「アンジェリーヌ、すまなかった……迎えに行くのが遅くなつて、本当にすまなかった……！」

「いいんです、お会いできて嬉しいです……！」

「アンジェリーヌ……昔のようにアンジェと呼んでもいいか？」

「はい、お父様……ぐすっ」

涙を袖で拭<sup>ぬぐ</sup>う。するとお父様がハンカチを差し出してくれた。

「アンジェ、このハンカチで涙を拭きなさい」

「はい、お父様」

お父様のハンカチで涙を拭く。そして、ソファにお父様と並んで座ってお話をする。

「お父様、頭をなでてほしいです」

「もちろんだ。よく頑張ったな、私たちの可愛いアンジェ」

なでなでと、お父様が私の頭をなでしてくれる。落ち着く……

「あの、お父様。お父様はどんな人ですか？」

「ん？ 私か？ そうだな……私は、アマドール・アンジュ・クロティルド。公爵だ。とても偉い立場にあり、それだけに責任は重い。だが、領地経営というのはやりがいのある仕事だよ」

「領地経営？」

難しそうな言葉に、お父様に聞き返す。

「ああ。私たち貴族は、多かれ少なかれ領地というものを持つ。民たちが暮らす場所を、管理しているんだよ。そうすることで、力のない民を守ってあげるんだ」

「守ってあげる……大切なお仕事ですね……！」

「ああ、そうだと。そしてね、領民たちはその代わりに、私たちに稼いだお金の一部をくれるんだ。税金、というんだよ。その税金のおかげで、私たちは立派な暮らしができる。だから、領民と領主は持ちつ持たれつの関係なんだよ。よく覚えておきなさい」

「はい、お父様！」

「アンジェは良い子だな」

またなでなでと私の頭をなでくれるお父様。嬉しいな。

「では、騎士団はどんな理由があつて雇<sup>と</sup>っているのですか？」

「うん、たとえば他国が攻めてきた時、盗賊が領地を襲つてきた時、私たち貴族が民を

守らねばならない。そのための力として、雇っているんだよ」

「なるほど……みんなのためなのですね！」

アリスさんもアランさんも、やっぱりすごいんだ。

「そうだとお」

「では、侍女や執事は？」

「それは、家の面子を保つという意味合いが大きいな。この家は使用人をたくさん雇えるんだぞと示すんだ」

「家の面子を保つと、なにかあるのですか？」

テンペスタファミリーでも、よく面子がどうかボスが言ってたけど。

「他の貴族や商人たちから侮られずに済む。そうすることで、結果的に領地や領民を守ることにも繋がるんだよ。領主が侮られてしまえば、悪い貴族や商人たちからちよっかいをかけられることもあるからね」

「お父様は、すごいです！ お父様は立派な公爵様なのですけどね！」

「……私は立派な公爵などではない。お前一人守ってやれなかったのだから」

お父様はそう言うと、少し悲しそうな顔をしてまた私の頭をなでてくれた。



私はクロテイルド公爵家の当主、アマドゥール・アンジュ・クロテイルド。

妻のベアトリス、息子のエルネスト、そして娘のアンジェリースという愛する家族に恵まれて、幸せに暮らしていた。

だがアンジュが三つになる頃、あの子は突然誘拐された。

身代金を払ったがあの子は帰ってこず、誘拐犯を捕らえた時には、アンジュは奴隷として売られた後だった。どれだけ尋問しても、犯人は売った先を決して言わなかった。

長い年月、アンジュを手当たり次第に捜していたが、ベアトリスは昨年、最後までアンジュのことを気にかけてながら逝去した。

それからすぐ、まるでベアトリスに導かれるようにアンジュの行方がわかった。テンペスタファミリーという組織にいるらしい、と。

だがテンペスタファミリーはかなりの力を有しており、そう簡単に手を出すことはできなかった。

綿密に戦略を練り、アンジュの誕生日の翌日、騎士団を突入させた。

もちろん他の奴隷たちも助け出し、公爵領の孤児院で保護した。孤児院にいられる年

齡ではない奴隷は、信頼のおける商人のもとへ奉公に出した。奉公先で、学べることも多いだろう。悪い話ではないはずだ。

そして今、私の目の前にアンジェがいる。

もう十六歳だというのに、細く、小さく、幼いままの我が娘。

私とベアトリスの愛し子。ああ、ああ……！

——やっと、会えた。

涙は見せない。可愛いこの子を、安心させてやりたいから。

父として、どっしりと構えて抱きしめてやりたいから。

アンジェは誘拐される前のことをほぼ覚えておらず、自分をアンという名だと思っただけだ。いたらしい。

彼女を、辛かっただろう奴隷時代の記憶から解き放つために、私はアンではなくアンジェと呼ぶことに決めた。幸い、アンジェもそれを受け入れてくれた。

可愛いアンジェは、無邪気にも私に頭をなでてほしいとねだった。可愛らしいおねだりに、私はすぐに頭をなでてやる。

アンジェは私に、様々な質問をしてくる。答えてやると、それだけで嬉しそうな顔をする。

無垢な少女のようなその姿に、胸が締めつけられた。

——私は、アンジェを守ってやれなかった。

そのせいで、アンジェは本来受けられるはずだった愛情も教育も受けられずに育った。私はこれから、この子にどれだけのことをしてやるだろう……？

「お父様。お母様は、どんな方なのでしょう？」

ふと、アンジェから質問される。

「……お前のお母様は、ベアトリス・エレオノール・クロテイルド。フェリシテ侯爵家から嫁いできた、お前によく似た美しい女性だった。お前がもつと成長したら、きっとそっくりになるだろうな。優しいが、怒ると怖くてな？ お父様は、最後まで頭が上がりなかつたよ。……お前のことを、とても心配していた。体が丈夫ではなかつたはずなんだが、お前がさらわれてから信じられないくらい行動力で捜し続けてな。去年までは元気だったんだが……無理が祟ったんだらう」

「そうなのですね……」

「ああ。……お前のお兄様が帰ってきたら、一緒にお墓参りに行こう」

「はい、お父様」

そつとアンジェの頭をなでる。

生きているうちに会わせてやれなくて、申し訳ない……

「お父様、お兄様はどんな方なのですか？」

「お前のお兄様は、エルネスト・アマドゥール・クロティルド。将来このクロティルド公爵家を継ぐことになる。希代の天才などと言われ、皇太子殿下と並び称されているよ。私から見ても確かに優秀な子だが、あれはどちらかと言えば努力の賜物だ。天才ではなく秀才と言ったほうが正しい。努力の仕方がとても効率的でな。一切の無駄がないから、周りからは大して努力していないように見えるんだらう」

「つまり、お兄様は努力の天才なのですね！」

「……なるほど、そういう考え方もあるのか」

アンジェの考え方は、とても良いと思う。

「ただ、あいつは優秀で頭が回るから、腹黒いところがある。気をつけなさい」

「そうなのですか？」

「……ご自分の息子をつかまえて腹黒呼ばわりとは、意地悪がすぎるのでは？ 父上」

噂をすれば影。

振り返ると、そこにはにっこりと微笑むエルネストが立っていた。



「えっと……」

腰くらいまで伸びた銀髪を後ろで一本に縛り、お父様によく似た紫の瞳でツリ目の男の人。

でも微笑んでいるからか、お父様より印象は柔らかい。

右目に装着したモノクルが、希代の天才と呼ばれるほど優秀な人なんだな、ということを感じさせる。

聞くまでもなく、この人が――

「久しぶりですね、可愛いアンジェ。僕はエルネスト・アマドゥール・クロティルド。このクロティルド公爵家の跡取りにして、君……アンジェリーヌ・ベアトリス・クロティルドの唯一の兄です。……さあ、おいで」

「え？」

「ハグをしましょう」

お兄様は、挨拶一つできない私を叱るでもなく、抱きしめてくれるという。なんて優しいんだらう。

「お前……っ！ お父様ともまだハグをしていないというのに！」  
 「ははははは！ これだから父上は！ だからやることなすこと遅いと母上に怒られるのです！」

「なんだと!？」

お父様とお兄様は仲良しさんみたい。とても楽しそう。

「えっと、お兄様、お父様」

「どうしました？」

「どうした？」

「二人一緒に、ぎゅーっしてください」

顔を見合わせるお兄様とお父様。

「……まあ、むさ苦しいですが仕方ありませんね」

「こっちのセリフだバカ息子」

「おや酷い。傷つきました。アンジエ、慰めてください」

そんなことを言いながらしゃがんで私を抱きしめるお兄様の頭を、よしよしとなでる。するとお父様が慌てて近づいてきて、私を抱きしめながら言う。

「ずるいぞネスト！」

「なにがですか？」

「なぜお前だけアンジエによしよししてもらってるんだ！」

お父様もしてほしいのかな？ お父様の頭もよしよしする。

「アンジエ……お前は優しいな」

「父上、顔がゆるんでいます。自重しちようなさってください」

「お前だってニヤニヤしてるだろう」

「唯一の妹が、こんなにも愛おしいとは思わなかったんですよ。少しくらい許してください」

「?」

よくわからないけど、嫌われてないよね？ 大丈夫だよね？

「お兄様、お父様」

「どうしました、アンジエ。そろそろ離れたほうがいいですか？」

「いえ、あの……私はお兄様とお父様に嫌われていませんか？ 大丈夫ですか？」

「嫌うだなんてとんでもない！ 大好きですよ、アンジエ」

「お父様もアンジエが大好きだ。なんでそんなことを思ったんだ？」

なんでと言われて考える。なんとなく不安だったただだけけれど……

「だって、私、勉強してないです……」

「……なんだ、そんなこと」

「お勉強も頑張らないといけないけれど、今はゆっくり休んでいいんだぞ。家族の時間を取り戻さないとな」

「そうですねよ、アンジェ。だから、大丈夫です」

「よかったです」

ほっと息を吐く。安心した。

「そうだ。アンジェ、これを」

綺麗な宝石がついたネックレスをつけられる。

「お兄様、これは？」

「母上が生前、肌身離さずつけていたネックレスです。形見として、君に差し上げます」

「お母様の……ありがとうございます、お兄様！」

嬉しいな。お母様の愛情を感じられる気がする。

「母上は、いつだってアンジェの味方ですよ。だから、いつでも笑顔でいてくださいね」

「はい、お兄様！」

「ようやく会えたのです。きっと母上も喜んでくれるでしょう」



それは僕、エルネスト・アマドゥール・クロティルドが二歳になったある日のことだった。

初めて見た妹という生き物は、僕の目にそれはそれは可愛らしく映ったのだ。

普通、下の子が生まれると上の子は大人たちに構ってもらえなくなりぐずるものらしいが、僕はそんなことよりこの可愛らしい生き物をどう大切に扱うべきかと、それはかりを気にしていた。

大人たちの目を盗んで妹に近寄っては、可愛い可愛いと頭をなでたりハグしたり。

可愛いアンジェ。僕の妹。

それは何歳になっても変わらず、僕が五歳になって……アンジェが三歳になる頃、何者かに誘拐されるまで、僕はアンジェにべったりだった。

ある日、アンジェに会いに部屋に行くと、アンジェがいなかった。

屋敷中のどこを捜してもアンジェは見つからなかった。急いで父上と母上に告げるも、時すでに遅し。アンジェを誘拐したという犯人から身代金の要求があった。金は払ったがアンジェが帰ってくることはなかった。

僕は、この日から人を信用しなくなった。そしてなんと少しでもアンジェを取り戻そうともがいた。

小遣いはアンジェの搜索のための費用に、少ない自由時間はすべて情報の精査にあてた。

僕が十七になった頃、母上が亡くなった。

思えば、親孝行などしてこなかった。申し訳ないと思う。

だがその後、有力な証言があった。

テンペスタファミリーの奴隷の一人が、母上の幼い頃によく似ているという。

僕は騎士団の諜報部隊を使って確かめた。

そして……ようやく見つけたんだ。可愛いアンジェを。

僕は父上と戦略を練り、騎士団を突入させた。

無事に作戦は成功し、僕はアンジェを取り戻した。

可愛い妹。けれど、これほどまでに愛おしいとは思わなかった。

妹のおねだりで、仕方なしに父上と一緒に妹を抱きしめる。むさ苦しい……が、この腕の中に妹がいるだけで、幸せな気持ちになる。

なぜか僕や父上に嫌われるのではと怯<sup>おび</sup>える妹に首をかしげるが、妹にとっては突然現れた家族なのだから、信頼されていなくても当然だ。

妹の信頼を勝ち取るべく、僕は母上の形見を妹に渡した。妹はとても喜んでくれた。

「さて、父上。アンジェを連れて、一緒に母上の墓参りに行きましょう」

「ああ、そうだな。アンジェ、行けるか？」

「はい。お兄様、お父様」

アンジェを連れて母上の墓参りに向かう。

これが、僕に唯一できる親孝行。ダメな息子で、申し訳ありません。母上。



お父様とお兄様に連れられてやってきた墓地。

お花を供え、お母様の眠るお墓にそっと触れる。すると、突然形見のネックレスが光り出し、その光はなぜか私の体にすうっと入っていった。

「……?」

「アンジェ!」

「アンジェ、どうしました!? 大丈夫ですか!」

「えっと……お父様、お兄様。大丈夫です。……今のは、なんですか?」

不思議と怖くはなかったけれど……

「私にはわからん……」

「僕もわかりません……」

「……?」

私たちが首をかしげていると、突然キラキラした小さななにかが私に近づいてきた。

『おめでとう、アンジェ。やっと力が復活したね』

「貴方は誰ですか?」

「……アンジェ? 誰と喋っているんです?」

お兄様には見えていないのだろうか? こんなに近くにいるのに?

『僕は精霊オプスキュリテ。精霊の愛し子アンジェ、会えて嬉しいよ』

「……精霊オプスキュリテ? 精霊の愛し子? ……よくわからないです」

なんの話だろうか? それに、この方は一体……

「……アンジェ。まさか、精霊が見えるのですか!」

「お父様とお兄様には見えないのですか?」

「ああ、精霊は限られた人間にしか見えない。アンジェ、本当に精霊が見えるのか?」

お前は精霊の愛し子なのか!」

お父様とお兄様は困ったような、焦ったような様子をしている。なにかまずいの

かな?

「えっと……」

『その通り! 君は精霊の愛し子なのさ。訳あって力を封印されていたけれどね!』

「私、精霊の愛し子らしいです」

「なんてことだ……」

お父様とお兄様を困らせたわけではないんだけど、どうしよう……

「でも、ずっと見えていたわけではないのでしょうか? なぜ今頃になって力が開花した

のです?」

『アンジェのお母さんが、アンジェの力を封印させたのさ。魔術師マチアスからアンジェは精霊の愛し子だと告げられ、アンジェを聖女選抜の争いから遠ざけるためにね』

「ええと……お母様が、魔術師マチアスという人から私が精霊の愛し子だと告げられて、